

困りを持つ子どもとその保護者への支援

坂本 理 こどもみらい館事業課担当係長

人は、ノンバーバル（非言語）なコミュニケーション手段をベースに生活しています。しかし非定型発達の子どもは、ノンバーバルなコミュニケーションが苦手なことが多く、そのために生じる『困り』から大人の『困り』そして関係性の負のスパイラルに陥りやすいと言えます。しかし、伝わらず応えてもらえないければ、誰でも手の付けられない表現の仕方をせざるをえないのです。発達障がいだからではなく、伝わらないから癪癥をおこすのです。また、保護者へも「子どもが困っている。だから一緒に考えていきましょう」と『困り』の視点からアプローチしていくと伝わりやすいでしょう。

児童虐待によって『困り』を抱える子どももいます。直接暴力を振るわれるような虐待区分ではないネグレクトであっても、後の問題行動に重大な繋がりがあります。乳児期は恐怖や不安に出会ったとき、愛着関係にある大人に関わってもらう中で、徐々に負の感情を統制し安心感の中で生きていけるようになるからです。ネグレクトの状態が続くと負の感情の中で過度の緊張状態に置かれ、それが特別なものだと感じず危険なことをしたり、他者の持っている負の感情にも気付きにくくなります。トラウマ反応は、リマインダー（過去のトラウマ場面に似た刺激）をきっかけにフラッシュバック（場面がリアルに蘇る）が起こり、問題行動へとつながります。急に乱暴な行為をする場合、頭の中ではトラウマ反応が起こっていることがあります。それを理解しないまま、叱責や禁止をしても、自責感や不信感、孤立感に繋がっていきます。支援者の叱責や問題行動を無視して強化しない等の関わりが、過去の虐待経験を想起させ、さらにトラウマ反応を誘発する場合もあります。

トラウマインフォームドケアは「トラウマによって生じた症状や行動を、危機時における正常な反応で適応のための対処と捉え、脆弱さよりストレングス（強み）に着目する」という考え方です。まずは寄り添い、その子どもを理解しようとしてください。わかってもらえば心の安定に繋がります。そして自分の感情に気が付けるように、早い時期から言葉で気持ちのラベリングをしてあげる事が有効です。しかしトラウマがあるうとなかろうと、どんな子にも指導やルールは必要です。むしろ、個人の権利を守られてこなかった子どもにこそ、お互いの安全を守るルールの存在についてきちんと教える必要があります。

世界の音楽シーンを席巻したスティーヴィー・ワンダーが子どもの頃、教室で飼っていたネズミが逃げ出しました。先生は「人並外れた耳を持っている彼に見つけ出してください」と話します。目が見えず自分は人の手を借りなければ何もできないと思っていた少年が、周りから認められ自信を得て、まい進します。先生というのは、金の卵と日々向き合い奇跡を起こせる素晴らしい職業です。

私たちは、子どもが“一緒に生きてくれる人がいる”と思える社会が作られることに、力を注いでいかなければなりません。乳幼児期には、大人が全身で向き合い「この先、決して楽しい事ばかりじゃないけど、心から嬉しくて楽しい瞬間もいっぱいあるよ。大好きだよ！」という事が身体ごと味わえる時間を沢山持てるよう関わることが、未来を生きる乳幼児へ送ることの出来る強いエールではないでしょうか。